

尾崎秀実の思想と行動

市川亮一

1. はじめに

日中戦争から太平洋戦争に至る総力戦の長期化の中で、天皇制ファシズム権力の人民支配はより一層強化された。しかし、その反面、総力戦体制の矛盾は人民支配の強化とともに民衆の負担を増大させ、民衆の間に自然発生的な厭戦感情を芽ばえさせた。1942年後半からの内外情勢の悪化の中で、44年7月の東条内閣総辞職を画期として、検挙・取締りという常套の弾圧手段では民衆の不満は押さえきれないほど、権力に対する不満が広範な国民大衆の間に拡大した。また、物価統制・配給統制の崩壊から生じたインフレと食糧難による生活破壊の中で、一部の民衆の間では目的意識的な反権力意識への方向性をもつに至った。

しかし、こうした客観情勢があったにもかかわらず、組織的な抵抗運動は起こらなかったし、権力を動揺させる現実的な力は生まれなかった。大多数の民衆は、家父長制的家族共同体を郷土・国家にまで拡大した家族国家観を中心とする天皇制イデオロギーの虚偽意識を見抜くことはできなかったといえる。日本の民衆は、運命共同体としての民族共同体という権力の宣伝する民族排外主義にとらえられ、反戦平和のインターナショナルな抵抗運動を起こしえなかったのである。

戦時下の頂点的思想家としての尾崎秀実の実践活動を、ナショナリズムとインターナショナルイズムの統一という視角から再検討することは、階級闘争の敗北の中での抵抗の問題を考察する場合に意義のあることと思われる。

尾崎秀実はゾルゲ事件で世間に周知の人物であるが、彼はまたすぐれた中国問題の評論家でもあった。ゾルゲ事件における尾崎の思想と行動の根底には、彼が終生愛してやまなかった中国問題が存在していた。「中国革命の従軍記者」を目指した尾崎の日中戦争当時の時事論文には、検閲下の「奴隷の言葉」でなされた不自由な表現をもってではあるが、随処に卓越した見解が見られる。そこで、彼の中国問題に関する評論を手がかりにしながら、公刊された『現代史資料・ゾルゲ事件』の獄中での供述を重ね合せて、尾崎秀実の思想と行動を再構成したいと思う。

2

尾崎秀実は、昭和17年3月15日、玉沢光三郎検事の訊問に答えて、第一次大戦から第二次大戦にいたる客観情勢の推移について、第一次大戦後に現われた顕著な事実として、第一は、英米仏等先進資本主義国の帝国主義政策の推進による相互間の対立が激化したこと。第二は、資本主義が変形歪曲せられた日独伊等後進資本主義国が帝国主義政策を採用・推進せしめたこと。第三は、資本主義体制を根本的に揚棄したソ連邦の出現したこと。第四は、植民地半植民地の間に民族主義的自覚が生まれ、民族解放運動が起こってきたこと。⁽¹⁾以上四点を指摘した。この世界情勢の分析の上にとって尾崎の中国論は展開された。

尾崎は当時の日本の論者の誰よりも中国の民族運動の動向を高く評価する。その民族運動の評価にしても、当時日本では高く評価されていた国民党政府の指導よりも民衆の動向を重視している。

「ここに問題なのは国民政府がこの昂揚する民族運動の波を自らリードし、或はコントロールする力を持ってはいないという点なのである。そのみか、一步を誤まればその波頭から叩き落されるおそれすら充分あるのである。(……)然しながら更に重要にして根本なる任務は直接動きつつある支那の民衆の動向を察知することである。⁽²⁾」

このように中国の動向を把握する尾崎は、第二次国共合作を成立させ、抗日民族統一戦線を成立させる最も重要な契機となった西安事件の勃発(昭和11年12月12日)の報を受取った日(12月13日)に書いた論文「張学良クーデターの意義」⁽³⁾で、西安事件を「支那社会の内部的矛盾の爆発」としてとらえ、当時まだ不明だった蒋介石の生存を予想し、共産党を中心とする「人民戦線」派と日本との対立が激化することを予言した。事態の進展はまさに尾崎の子想どおり見事に適中し、尾崎を一躍一流ジャーナリストの座に仲間入りさせた。

歴史の真実を引き出すには仮説が必要とされることが多い。ものごとの法則性についての深い認識にささえられて、はじめて目の出来ごとの意味が正確にとらえられるのである。しかしながらジャーナリストとしての活動を余儀なくされた革命家にとっては、「究極目標のイメージを伏せて、その目標に至る現在の過程を短期的に切りとって中間目標のみを指示するエッセイを発表してゆく⁽⁴⁾」ほかはなかった。

尾崎の公開された評論は、検閲下の不自由な表現のため、その意図はほかされている

(1) 『現代史資料(2)ゾルゲ事件(二)』、みすず書房、1962年、201～2頁。以下、『資料』と省略。

(2) 尾崎秀実『嵐に立つ支那』、亜里書房、1937年、95～97頁。

(3) 「中央公論」、1936年12月号、『嵐に立つ支那』所収。

(4) 鶴見俊輔「翼賛運動の設計者」『転向』中巻、平凡社、1962年、79頁。

が、明らかに究極目標のイメージがあり、合法ギリギリの線で、翼賛時代の偽装転向の知識人に訴えかけていた。

「支那は今や重大なる一つの転換期に立って居ることを認める。(……)即ち、支那は今日なお民主主義＝民族革命の過程にあるのであるが、その過程の中において民族戦線の統一整備を再び遂行し、或いはまさに成し遂げんとしつつある点こそ最も重大なる中心問題であろうと思われるのである。これがもしも成し遂げ得られるならば支那の民族革命は急速に発展し、ブルジョア民主主義革命の段階は直ちに完成され経過せられると思われるのである。この意味において国民党と共産党との新なる関係は極めて興味深くかつ重要な⁽⁵⁾のである。」

尾崎は蘆溝橋事件勃発(7月7日)の報を受け取り、その直後1937年7月12日に書いた「日支問題の新段階」⁽⁶⁾という論文の中で、蘆溝橋事件を「世界史的意義を持つ事件」として世人の注意を喚起している。この事件の勃発こそすなわち尾崎によれば「第二次世界大戦の全面的展開」の第一歩にはかならなかった。これまで北支問題の解決は、単に「北支の極地的解決方法」で事足りたが、今や全支問題として「全支那民族を相手」に戦わなければならないのである。支那の最近の統一運動とは、「国家的統一」の問題であるとともに「民族的統一戦線」の問題である。西安事件以後国民党、共産党両党間における妥協及び諒解は既定の具体的事実であり、国共両党は内部に深い対立を蔵しながらも、国家的統一を促進しつつあった。この点にこそ北支問題が「全支的」に解決されねばならない重大性がある。「国民政府の持つ武力は恐らく大して問題でないであろう。しかしながら支那民族戦線の全面的抗日戦は遙に重大な意義を持っている⁽⁷⁾」と事態は、まさに尾崎の予想する如く進展していった。

第一次近衛内閣は蘆溝橋事件勃発に際して「現地解決」の不拡大方針を声明しながら、出先軍部の圧力に押され、7月11日、政府は華北に派兵を決定し、翌日には近衛自ら各界に挙国一致の協力を要望した。この言動に刺激された中国側は、中央軍をさらに動員して北上し、蔣介石は19日有名な「生死関頭」演説を行ない、国をあげての抗日態勢の先頭に立つ決心を示した。7月28日、北支那駐屯軍は平津地方一帯に攻撃を開始し、翌29日通州事件が起り、8月9日、上海において大山中尉射殺事件が起きて、13日から第二次上海事件とよばれる日中両軍の戦闘が始まった。ここに戦火は華中に拡大した。11月6日、日本軍は杭州湾に敵前上陸。強行軍を重ねて中国軍の背後を通り抜け、首都南京へ迫り、12

(5) 尾崎秀実「転換期支那の基本問題」『中央公論』、1937年7月号、『嵐に立つ支那』、324頁。

(6) 「改造」1937年8月号、『現代支那批判』所収、中央公論社、1938年、117頁以下参照。

(7) 同上、128頁。

月10日、南京城総攻撃。13日、南京占領となり、かの悪名高き南京残虐事件をひきおこし、国民政府は武漢地区へ退いた。翌1938年になると、南京側から徐州に迫った日本軍は、ここで50万の中国軍と会戦。これを破って、5月19日、徐州を占領。10月には武漢地区も占領。国民政府は奥地重慶へ退いた。

この後日本軍の進撃は止まり、長期戦の様相を帯びてきた日中両国の抗争を尾崎はどのように受けとめていたか。尾崎は昭和13年4月10日に書いた「長期抗戦の行方」⁽⁸⁾の中で率直に真情を吐露している。

「戦に感傷は禁物である。目前日本国民が与えられている唯一の道は戦に勝つということである。その他に絶対に行く道はないということは間違いのないことである。『前進！前進！』その声は絶えず呼び続けられねばなるまい。それにしてもいろいろな感慨や反省が生れてくることはどうしてもやむを得ない。」⁽⁹⁾

尾崎の感慨や反省とは一体何であったか、また何故生まれてくるのか。日本におけるナショナルな関心と中国におけるナショナルな関心が相対立する方向に進み、長期戦の様相をおびてきた事態の中にあって「単純でない」マルキスト尾崎は何を悩み、また如何なる方法によってこの悩みを解決せんとしたか。

上申書の中の「近年私は一方国際主義者たるとともに、日本民族主義者に成り了せていたのであります。私に就てはこの両者は矛盾しないと考えられました。あるいは少くとも矛盾しながらも私の中に長く両存してきたのであります。」⁽¹⁰⁾という一句。なすわち、「インターナショナルイズムとナショナルイズムの統一」とは、具体的にどういう形で、尾崎の内面において結びつけられていたのか。

尾崎の公開された評論では、究極目標のイメージが伏せられているので、ある時には「ナショナリスト」の一面が強烈に打ち出されて、彼のいわゆる「多分に国策的、日本の立場からする評論」として当時の超国家主義者・大アジア主義者にまじって選ぶところのない表現をしているものもある。

尾崎はまた昭和研究会の一員として、東亜協同体論の熱心な提唱者の一人でもあった。尾崎は究極目標のイメージとしては、日支事変の処理をとおして中国の社会変革とともに日本社会の変革を考えた。それが尾崎の「東亜協同体論」であった。東亜協同体論や東亜連盟論が論壇をにぎわすのは、昭和13年11月3日、近衛首相が日本の戦争目的を規定して「東亜永遠の安定を確保すべき新秩序の建設」を声明し、つづいて12月22日に日華国交調

(8) 「改造」1938年5月号、『現代支那批判』所収。

(9) 同上、185頁。

(10) 『資料』、10頁。

整のいわゆる近衛三原則の声明が行なわれて以後のことである。その中で、尾崎は一般に日中両民族の「互助連環説」を基礎とした代表的な論客とされており、ポリシー・メーカーとしての一面を持ちながら、国策に便乗して日本の侵略を合理化するものではなかった。むしろ中国の民族問題を解決する方向で、東亜における新秩序を創建すると主張する点に特徴がある。尾崎は、昭和13年中に書いた論文で断片的にふれておいたことを集大成し、東亜協同体論の発生する政治的な必然性とその発展の可能性について尾崎の最も有名な論文『東亜協同体』の理念とその成立の客観的基礎⁽¹¹⁾で論旨を展開している。

すなわち、東亜協同体の理念が発展するか否かは、日本国内のこれを推進すべき勢力の結成が最大の問題である。そこで尾崎は、日本の社会変革をイメージとして思い浮かべながら、国民再組織の必要を説き、日本経済の再編成を主張するのである。

これ以後、尾崎は東亜協同体論の代表的な論客として、またゾルゲ諜報団の主要メンバーとして、情報活動に従事しながら、一方では、昭和16年10月15日検挙に至るまで、「中央公論」「改造」等を中心に精力的に評論活動を行なったのである。

尾崎は、検挙される直前に編集者に手渡したという最後の公開論文「大戦を最後まで戦い抜くために」⁽¹²⁾で、第二次世界大戦を「世界史的転換期の世界最終戦」であると考えている。「この最終戦を戦い抜くために国民を領導することこそ今日以後の戦国政治家の任務であらねばならない」とこの論文を結んだ尾崎は、社会変革についていかなる構想を持っていたのか。以下の章では、尾崎の内面におけるナショナリズムとインターナショナリズムの統一の問題を解明していくことにする。

3

尾崎は獄中で検事の訊問に答えて、第一次大戦から第二次大戦に至る世界情勢の推移を述べたのち、「私は第二次世界大戦は必ずや世界変革に到達するものと信ずる」と自分の確信を述べている⁽¹³⁾。彼はその理由として、第一には、帝国主義陣営が正統派帝国主義国家群とファッショ派帝国主義国家群とに分裂しており、帝国主義相互間の闘争は、両者の共倒れか、一方による他方の制圧をもたらし、敗戦国家では、第一次大戦の時と同時に、プロレタリア革命に移行する可能性が多く、勝者の側でも、「内部的な疲弊と敵対国の社会変革」との影響による社会革命が勃発する可能性があること。第二には、共産主義の強大な国家ソ連邦が存在していることである。ソ連邦は、あくまで帝国主義の混戦には超然としてい

(11) 「中央公論」, 1939年1月号。

(12) 「改造」, 1941年12月号。

(13) (14) 「資料」, 202頁。

るべきであり、独ソ戦の勃発は、自分の立場からして、実に遺憾なことである。しかしながら、ソ連はドイツに対して終局の勝利を得るであろうし、その結果は、ドイツが最も速かに内部の変革の影響を受けるだろう。第三には、植民地半植民地が、この戦争の過程を通じて、自己解放を達成し、支那のような国家においては、共産主義的方向に進むであろう現実の期待がかけ得られる。それ故、第二次大戦は、帝国主義国家による世界再分割には至らず、世界革命に到達するであろう、とその理由を列挙する。⁽¹⁴⁾

尾崎は、公開された評論の中で、しばしば、「支那の非資本主義的な発展の方向の可能性」とぼかした表現をしているが、1930年代において、中国共産党の現在の姿を予想しえたものが、日本人の中に果して幾人いたであろうか。

それでは、尾崎は日本民族の危機の打開をもくろむ「ナショナルリスト」として、日本の社会変革の条件をどのように考えていたか。尾崎によれば、日本帝国主義は、次のような脆弱性をもつ資本主義国家である。第一には、社会経済体制の中に、封建的遺制を残存する。第二には、国内資源が欠如し、英米市場への依存性が強い。第三には、軍部が大きな比重を占めている。と指摘する。⁽¹⁵⁾それ故、日本が英米との全面的衝突に至るのは必至であり、枢軸側の一員として立つのもまた既定の事実である。緒戦の南方への進撃は成功するであろうが、「その後の持久戦に於ては日本の本来的な経済の弱さと、支那事変による消耗がやがて致命的なものとなって現われて来るであろうと想像したのであります。しかも斯る場合に於て日本社会を破局から救って方向転換ないし原体制の再建を行う力は、日本の支配階級には残されておらないと確信しているのであります。結局に於て身を持って苦難に当たった大衆自体が自らの手によって民族国家の再建を企図しなければならないであろうと思います。」⁽¹⁶⁾

しかしながら、日本自体のプロレタリアートは、政治的力量も経験も浅く、自らの党組織を持ちえないどころか、党組織は壊滅の状態にあった。ここにおいて、尾崎は、「東亜新秩序社会」の構想を抱くのである。彼は日本社会変革の時期を、早ければ昭和17年上半期か下半期と推定し、このような転換期においては、日本だけの力では重要な転換を行ないえないから、「ソ連及び資本主義機構を離脱したる日本並に中国共産党が完全にそのヘゲモニーを握った支那この三民族の緊密な提携援助を必要とし、この三民族の緊密な結合を中核として先づ東亜諸民族の民族共同体の確立を目指した。」⁽¹⁷⁾この「東亜新秩序社会」は「世界革命の一環をなすべきもの」であって、「世界新秩序完成の方向と東亜新秩序の形態とが相矛盾するものとはならない」のは当然であった。

(15) (16) 『資料』, 203頁。

(17) 『資料』, 129頁。

次に問題とされるべき点は、尾崎の日本社会の変革の具体的構想である。尾崎の「ナショナリズム」の構造、マルクス主義者としての「インターナショナリズム」の構造を検討する段階に到達した。尾崎は、彼の生きた「暗い谷間」の時代状況下において、当時の状況をどのように把握し、その時代との緊張関係において、いかなる主体的な働きかけを試みたか。

尾崎自身、「私は元来単純な коммуニストではありません。きわめて政治的な考慮に立っていたので、⁽¹⁸⁾ 近來はほとんど民族主義者だったのです。」と昭和18年3月5日付の獄中からの書簡に書いている。それでは、「単純でない коммуニスト」「ほとんど民族主義者」ということは一体何を示すのか。

また獄中で書いた上申書には次のように書いている。「確かに近年私は一方国際主義者たるとともに、日本民族主義者一我々に日本国家主義者ということが許され難いとすれば一に成り了せていたのであります。私に就てはこの両者は矛盾しないと考えられました。或いは少くとも矛盾しながらも私の中に長く両存して来たのであります。」⁽¹⁹⁾ 尾崎のこの一見矛盾するかに思える「ナショナリスト」の一面と「インターナショナリスト」の一面を結びつける媒介項となったものは一体何であるのか。

尾崎を日本のその他の「単純な」マルキストと区別する重要なメルクマールは、「日本の天皇制」の把握の問題にあると思われる。そこでまず、尾崎の国体観を見てみたい。

戦前における代表的国体観としては、日本資本主義は高度な帝国主義段階に到達した国家であるが、日本の国家体制は、日本の特殊性としての封建的諸勢力の根強い残存にその特徴がある。この地主資本家階級による日本の現実の政治支配体制をコミンテルン32年テーゼでは「天皇制」と呼び、この「天皇制」の打倒を第1目標としたのである。これが27年・32年テーゼ以来の当時の日本共産党の公式見解であり戦術であった。尾崎はこれに対して異なる立場にあった。

尾崎自身、昭和17年4月14日東京拘置所において、玉沢光三郎検事の訊問に答える中で、次のように述べている。⁽²⁰⁾ 日本資本主義の現段階の特徴は、発達の後進性よりむしろ内部の不均衡性にある。すなわち、封建的な勢力がそのまま資本主義的に強力な勢力として変化転化したところにあるのである。資本家（地主）＝軍部（官僚）の結びつきが、政治推進力の本質的な中核をなしているようにみうけられるが、しかし資本家階級も直接の指導力を持っていない。官僚＝軍部といえども、結果的には資本家の利益に帰着するもので

(18) 『愛情は降る星の如く』、青木文庫上巻、1962年、66頁。

(19) 『資料』、10頁。

(20) 『資料』、284頁。

あるにしても、直接には資本家的利益を目指しては行動していない。かえって独自の主観的意図に基づいて資本家抑圧的に行動することもあり、それ故、現段階における日本の政治支配の上では、「天皇」の地位は擬制的なものにすぎなくなりつつあるから、日本の現支配体制を「天皇制」と規定するのは正しくない。このような観点から、尾崎は日本共産党とは異なった戦術を自己の責任において打ち出す。

「更に一步を進めて共産主義者としての戦術的考慮から見ても、『天皇制』打倒をスローガンとすることは適当でないと考えます。その理由は日本に於ける『天皇』が歴史的にみて直接民衆の抑圧者でもなかったし、現在に於て如何に皇室自身が財産家であるとしても、直接搾取者であるとの感じを民衆に与えてはいないという事実によって明瞭であろうと考えます。私一個人としては別に皇室と何等の関係もなく、恩もなく、又恨みもありません。妙な言い方ではありますが、これは少くとも『天皇』を宗教的に信奉する可なり日本人以外の普通の日本人の感じ方であろうと思います。革命的スローガンとしては民衆の直接の熱情に働き掛け得られる如きものでなくてはならないのでありますから、その意味では『天皇』を直接打倒の対象とすることは適当でないと思われます。問題は日本の真実なる支配階級たる軍部資本家の勢力が、『天皇』の名に於て行動する如き仕組に対してはこれにどう対処するかの問題であります。併し乍らこの場合に於ても真実の支配者の役割とその大衆に及ぼす意味とを明かにして、これを直接攻撃の対象とすべきものであらうと考えます。」⁽²¹⁾

尾崎は「天皇制」権力の本質と、日本人の心情の上にある「天皇」個人とを区別し、戦術的考慮からも「天皇制」を直接打倒の対象とすることは正しくないと言っているのである。これはコミンテルン27年・32年テーゼに縛りつけられていた戦前当時の日本人のマルクス主義者の中では異色の存在である。尾崎の柔軟性は、一人の「自立」したマルクス主義者として高く評価される。

尾崎は、第一次大戦から第二次大戦にいたる客観情勢の把握から、支那事変が拡大して世界戦争へ発展することを予想し、この第二次世界大戦は世界変革にいたることを確信していた。日本は英米との全面的衝突に至ることは不可避であり、その場合対英米戦においては必ず敗れるであろう。そしてその破局から脱出するためには、日本自体のプロレタリアートが未成熟のために、ソ連と提携し、日本社会の変革を行なわねばならない。その場合、中国共産党がヘゲモニーを握った中国とも緊密な提携を行なう。中国共産党に指導される中国と資本主義体制を転換した日本と社会主義国ソ連が一体となって「東亜の新秩序」を導き、東亜被圧迫民族解放のため、英米帝国主義と戦うというのが、尾崎の「東亜

(21) 『資料』, 284～5頁。

新秩序」の構想であり、尾崎の「東亜協同体」論であった。その「東亜新秩序」の構想は、世界変革の一部であり、「世界新秩序社会」と「東亜新秩序社会」は不可分の関係になければならなかった。

尾崎は当時支配的であった一国社会主義の理論ではなく、世界的共産主義への道の中で日本の果す役割を考慮していた。尾崎は日本の社会変革を世界革命の一環としてとらえ、それを具体化するプロセスの中に、彼自身の「東亜協同体」論という政治的プログラムを想定していたのである。

さて次に我々は、尾崎の「ナショナルリズム」の構造を、彼の最も「ホンネ」と思われる訊問調書の日本社会変革の構想を骨格にして、「ギソウ」と「ホンネ」の入り混じった時論・上申書・獄中書簡等から明確にしていかなければならない。

「ナショナリスト」尾崎にとって最も重要な問題は、日本民族の将来をいかに打開するかの問題であった。尾崎にとって帝国主義国家日本は真の日本民族の国家ではない。尾崎は日本民族の危機を救おうとして、「世界革命実現の一里塚」としてのソ連防衛のために、日本の機密情報を報告するゾルゲ諜報団にも積極的に参加し、「中央公論」「改造」等による合法の評論活動とともに、非合法活動にも精魂をうちこんでいたのである。また日本民族の危機を打開せんとして日本社会の変革を考えたが、前衛党組織が壊滅状況にあったため、積極的に権力中枢にも接近し、近衛のブレーンの一人となったのである。

それでは尾崎は、日本社会の変革を具体的にはどのように考えていたのか。尾崎は、1939年秋、同志川合貞吉との会話で最も自信に満ちて、「近衛はね。結局はケレンスキー政権だよ。次の権力のための橋渡しさ。僕はいま近衛の四人のブレーンの一人になっているんだが、——おうはこのケレンスキー政権を支持して、やがてくる真の革命政権のために道を開く一僕ははそんなつもりでいまやっているんだ。」⁽²²⁾と語っている。しかし、この見通しはかなり幻想を含んでおり、近衛はケレンスキー的役割を果たすどころか、1940年9月、第二次近衛内閣は日独伊三国同盟に調印し、事実上太平洋戦争への道に踏み切ったのである。尾崎は、第一次近衛内閣解散（1939年1月）後も近衛のブレーン・トラストの間でもたれていた朝飯会に出席していたが、第二次近衛内閣成立（1940年7月）後は、次第に近衛の周辺から遠ざけられた。

検挙（1941年10月15日）までの2年間、ゾルゲと尾崎の最大関心事は、日ソ間に戦争は起こるかどうか—日本が北進してソ連をつくか、南進して米英にあたるか—の国策の方向を探知するにあった。1941年に入ると、彼らの根本目標は、日ソ関係・独ソ開戦の時期・日米交渉の経過の三点をめぐって、日本の最高政治がどう動いていくかを正確に把握する

(22) 川合貞吉『或る革命家の回想』、日本出版協同株式会社、1953年、308～9頁。

ことにあった。

尾崎は破局に際しての支配体制の急激な崩壊、大衆の飢餓状態からの脱却を目指す本能的な反抗は想定するが、日本のプロレタリアートの掘って立つべき前衛党が壊滅状態にあるとき、その大衆内部の変革の指導的中核をどこにおくのか、またその場合の指導者は果しているのかどうか、という問題について次の如く述べているにすぎない。

「此の世界資本主義社会の崩壊の過程に於て重要な意義を持つべき所謂東亞新秩序社会の実現は、支那事変を契機としてその決定的なものであるということは私の最初から信じて疑わなかったところのものであり、其の時期に於けるソ連との提携援助に付ては幸にして私が十余年来ゾルゲとの諜報活動を通じて、コミンテルン乃至ソ連機構の有力なる部門と密接に結び付いて居るという事実⁽²³⁾に依って容易であると思っております、其の場合に於ける支那との提携に付ても充分な自信を持って居ったのであります。」

このあたりになると尾崎の思考にはいわゆる「ユートピア」的側面が強くなり、希望的観測が加わってきている。実現可能な現実的基盤を国内に持ちえないがために、ソ連の力を借りて日本の社会主義革命を行ない、世界的共産主義社会の過程をとるという「トロツキスト」的発想にもつらなる「ユートピア」の構想とならざるをえなかったのである。一国社会主義革命を世界革命の実現に待ち、革命を自力で行なうという発想を欠落させた中では、「民族」を「国家」から引きはがして国家権力に対する反戦活動は行ないえても、最後にはそのために闘った「民族」すらをもコミンテルンに託さざるをえなかったのである。この点に、尾崎のナショナリズムの最大の問題点があると思われる。

最後に、尾崎のナショナリズムの構造を概括してみる。

彼は中国問題こそが日本民族の運命を決する最も重大な問題であると考え、全力をあげて中国問題研究に取り組んでいた。中国評論家としての尾崎のユニークな点は、中国の民衆が中国社会の進化発展に果す役割を重視し、民族の問題を中国問題理解のための座標軸にすえたことであった。尾崎は、「実に見盲目的にして方向を知らぬかに見えながら、しかも驚くべき根強さをもって土に即し營々として生きつつある支那の民衆の姿から眼を放たざることを念としてきた。」⁽²⁴⁾のであった。

尾崎は、「昭和11年の暮から12年の春にかけて支那の統一と建設の一応の成功に伴って、支那の資本主義的な発展を高く評価してこれを支持し、更にこの線に沿ふて日支間の協調提携をはからんとする」⁽²⁵⁾を代表する主張⁽²⁶⁾の現われた時、このような見解には批判的であ

(23) 『資料』, 129頁。

(24) 『嵐に立つ支那』自序。

(25) 尾崎秀実「時局と対支認識」『改造』, 1937年10月号, 『現代支那批判』所収, 130頁。

(26) 矢内原忠雄「支那問題の所在」『中央公論』, 1937年2月号。

り、彼等と論争したことからも分るように、蔣介石政権による国民政府の中国統一には高い評価を与えていない。尾崎によれば、南京政府は半植民地・半封建支那の特質の集中的な現われである官僚・軍閥・買弁がその本質を決定しており、民衆の真の支持をかち得ていない蔣介石政権は、日中間の緊張関係のために、民族戦線の上に乗ってはいらぬもの、⁽²⁷⁾いつその巨大な民族戦線運動の波頭から叩き落とされるか分らない不安定政権であった。尾崎が提携を望んだのは、官僚・軍閥・買弁を代表とする蔣介石政権ではなく、半植民地・半封建社会を脱却した中国共産党によって指導される、現在の「人民中国」であったといえる。尾崎は日中戦争当時の日本人としては卓越して適確に当時の「現代中国」の反帝・反封建の大衆運動としてのナショナリズムを理解しえたのである。

しかし、尾崎が自分自身の問題として日本民族の危機を救おうとした場合に、中国に対して如何なる態度をとったか。尾崎の論理によれば、「蔣介石政権の中国」と「人民中国」は区別され、「蔣介石政権の中国」に対する軍事行動は徹底的に押しすすめねばならなかったのである。また先進英米帝国主義国に対した場合はどうであったか。「打倒英米」のスローガンが、先進帝国主義国に対する後進帝国主義国日本の侵略競争の反撃の根拠として、国家主義的ナショナリスト達によって唱えられた。尾崎は、世界的共産主義社会へ到達するための一プロセスとして日本は「民族主義的方向」をとり得ると考えており、「打倒英米帝国主義」を唱えた。尾崎にとって第二次世界大戦は蘆溝橋事件以来不可避であったし、日本が枢軸側になって英米と戦うことも自明の前提であった。しかし日本は緒戦において勝利を得ても、経済力に弱点があるから、長期戦に持ちこまれ結局は敗退するであろうと思っていた。尾崎自身の立場からすれば枢軸側が簡単に敗北するのは好ましくないのであって、英米の全勝に終わらさないためにも、日本は社会的体制の転換を以てソ連支那と結んで英米へ対抗する一方、英米に抑圧されている南方諸民族の解放をスローガンとして打倒英米を目指すのは大いに意味があり、この点については日本の国粹的南進主義者の主張とも殆んど矛盾しなかったのである。

ナショナリズムには、二つの異種なるものがある。すなわち、その一つは、反帝・反封建的な大衆運動としての中国に代表されるようなナショナリズムであり、それは社会変革と結びつくものである。もう一つの国権的国家主義的ナショナリズムは、社会変革とは結びつかないもので、かえって前者の民族運動を弾圧する反動的なものとして現われる日本のナショナリズムに代表されるものである。尾崎のナショナリズムは、この異質なナショナリズムがはっきり自覚的に区別されず、無自覚のまま混在していたといえる。

尾崎の「ナショナリズム」と「インターナショナリズム」は、「民族」と「国家」を切

(27) 尾崎秀実「南京政府論」『中央公論』、1937年9月号、『現代支那批判』所収。

りはなすことによって結びつけられ、統一された。しかし、当時の日本帝国主義国家の中にあつては、尾崎を含めてほとんどの日本人には、中国における意味での反帝的構造のナショナルイズムは欠落していたといえる。

ナショナルなものの徹底的追求を通じてはじめてインターナショナルへの道が開かれてくるのではないか。尾崎の生きた時代には実現不可能だった「内部における解放（社会変革）と外部にむかっての解放（民族独立）という二重課題を一つのものとして受けとめねばならない。」時代との緊張関係の中でその時代と対決し時代を乗り越えようとしてついに傷つき挫折した尾崎秀実の誠実なる苦闘の中に我々は「ナショナルイズムとインターナショナルイズムの統一」のために相剋した先覚者の生涯を見出す。問題は尾崎によって解決されたのではなく、尾崎は更めて我々に問題を提起したのである。その問題をどのように受けとめ、いかに発展させるかが我々の課題である。

（筆者の住所：川崎市幸区河原町1 河原町団地1-1418）

(28) むのたけじ『雪と足と』、文芸春秋新社、1964年、21頁